

## 7 高次脳機能障害者に対する社会参加支援について（2）

ー地域生活支援を行った社会的行動障害が前景にある事例ー

自立支援局 水村慎也、河原勝洋、三好尉史、河野智子、加覧博徳、佐藤 静、菅原由貴子、  
安部恵理子、伊藤美樹、大久保絵美、小林千明、野下道子、川嶋陽平

病 院 浦上裕子

### 1. はじめに

事例Aさんは、社会的行動障害を主な症状とする高次脳機能障害があり、訓練開始当初は大声や攻撃的な行動等、情動コントロールの障害のため、訓練プログラムへの参加が困難であった。しかし、攻撃的な行動の背景や本人の求めていることを日頃の言動から推察した対処方法を選択することで、感情の安定を図れることがわかった。また、家族や近隣住民、地域のサービス提供事業者等を含めた地域サービス支援会議で支援方針の統一を図ることで、安定した訓練参加につながり、日中活動サービス利用についての地域生活支援体制を構築した事例について報告する。

### 2. 事例プロフィール

Aさん 30代 女性、障害状況：びまん性軸索損傷による高次脳機能障害（社会的行動障害：情動コントロール障害、意欲・発動性の低下、対人関係の障害／記憶障害：前向・逆向健忘／注意障害／遂行機能障害）及び視覚障害（両視野狭窄：同名半盲）、左下肢機能障害

受傷後：5年経過 ※定型的な検査実施は困難のため神経心理学的検査はなし。

利用形態：自立訓練（生活訓練）を通所にて週2～3回利用。サービス提供期間：19ヶ月

### 3. 地域サービス支援会議の実施

訓練場面では対応職員を限定し、面接を中心とした個別対応を行った上で、その後に集団訓練へ参加する形式とした。本人の興味・関心がある調理（ティータイム）、思い出話を定型化することで不安感が解消したため、攻撃的な行動が減少した。訓練の後半は、本人、家族、担当保健師、移動支援事業者、訪問介護事業者等との地域サービス支援会議を重ね、修了後も安定した生活環境を継続できるよう検討した。

### 4. 地域生活支援体制の構築

ヘルパーを利用した外出（散歩）や家事以外にも、より充実した社会参加が図れるよう、地域生活支援センターが運営する喫茶店、公営プールへの外出を実施した。駅構内や狭所通過時に本人が強い不安を訴えたため、移動支援事業者が視覚障害の特性を適切に理解できるよう、ロービジョンシュミレーションキットによる体験や移動介助の方法を教授した。修了後は新たな試みとして、NPO法人が開催する音楽会（コーラス）への参加について連携しながらすすめている。

### 5. 今後の課題

より身近な生活環境で支援を展開できるよう通所型のみならず、アウトリーチ型の相談や訪問訓練が必要である。社会的行動障害が前景にあり大声や攻撃的な行動等、情動コントロール障害が顕著となる事例については、本人の言動やご家族からの情報提供をもとに周囲の環境との関係性を整理することや、その背景にある生活史や身体上の障害特性等も理解したうえでの支援が重要となる。